

「駒」との思い出

松 尾 達 二 (52期)

昭和20年終戦の年の秋、筑紫中学（現筑紫丘高校）の箱崎馬出地区同窓会が「駒」との最初の出会
いだった。私は同年6月の福岡大空襲で戦災に会い、馬出に来たばかりであった。

この会合で「駒・A・N」の同級生と知り合い以後4人組の交遊がスタートした。中学4年生、16
才だった。

「駒」と呼ぶ様になったのは、一番親しみがもて簡単明快だったからと思うが、母上が「駒ちゃん」
と呼ばれていたのも、それが影響したかもしれない。とまれ私にとって「駒は駒」であり、今後に変
えることはない。今更変えると逆に「駒」から怒られるだろう。

四人組の交遊

四年終了で「A」は福岡農専に入学し「N」は製氷・サイダー製造の家業に就いたので5年生の時
は「駒」と私の2人になったが、家が近かった故か4人コンパは頻繁に続けた。

1. メリケンパーティ

各人メリケン粉を持ち寄り「N」持参のサッカリン（化学甘味料）を入れ練って鍋で焼き上げ完成
である。（注：当時は砂糖、サッカリン等全て統制で配給以外は闇価格で高価なものだったが、「N」
家はサイダー製造用の配給があった。それで我々はその恩恵に浴くしたのである。）

焼き上がるのを待ちきれない様にして「ウマイ、ウマイ」と舌鼓をうち空腹を満たし、甘味を堪能
した。今でもあの美味しさは忘れない。

具がない甘いだけの「メリケン粉焼」であるが、当時は、1人1日2合3勺の米しか配給がなかつ
たので、常時腹ペコだった我々にとって満腹感を覚えた上、甘味を食することが出来た。最高のご馳
走であった証拠に、その回数は非常に多かった。

2. ゲーム

最初は花札ばかりしていた。座布団1枚あれば開帳できたのでよくやった。その後、「A」が麻雀
牌を持って来た。「物凄い面白ゲナ」ということで、満腹後は麻雀の研究に励んだものである。「駒」
も私も麻雀狂になるキッカケとなった。西南時代には、もう一角の雀士然としてよく打ったものであ
る。

3. 「コックリさん」

食べる、遊ぶ、次は勉強だ。四人共勤勉とは程遠い毎日を送っていたが、学校の試験は避けて通れ
ない。試験前になると「佐賀県鹿島の祐徳院のお稲荷様、福岡市箱崎東町〇番地、高田幸助（父上）
宅に電気のように早く来て下さい。」とお願いし、お稲荷さん（コックリさん）に来て頂き、試験問題
をお尋ねし、教えて貰った箇所だけ勉強したものである。当たる確率は5割よくて6割位だったと思
うが、4人とも卒業乃至進学出来たのであるから「コックリさん」の恩恵に浴した事実は否めない。

4. 放生会

箱崎宮の秋祭で福博の一大行事である放生会には毎年4人揃ってお参りした。「N」家がお宮の直ぐ横だったので集合場所だった。「甘酒、お寿司等」のご馳走に預かり、お宮に参拝した後お目当ての「ノゾキ、サーカス、積木倒し」等に興じたものである。今でも懐かしい思い出だ。

いよいよ中学卒業の時が来た。「駒」は西南、松山経専、福岡経専の受験に失敗、彼の人生で初めて挫折を経験した。一時は「大学へ行かず働く」と云った。が結局「高等簿記に行くことにした」と大濠の高山学園へ入学した。そして翌昭和23年春、西南に再挑戦し、見事合格、この時、高田駒次郎教授の卵が生まれ、輝かしいスタートを切ったのである。合格までの一年間、自問自答を繰り返し、自分の将来について真剣に考え、悩み、苦しんだと思う。その結論は「教育者」になること。それも「大学教授」になると明確に目標を立てたのである。そして、中学時代は地味で目立たなかった彼が、明朗闊達な好青年に生まれ変わった。更に未経験の野球部に入部、スポーツ精神も体得し、「大学教授・野球部長」の二大目標を見事に達成、旧友としてどういう賛辞も惜しまない。

「いいじゃないか、いいじゃないか。まあ一杯いこう」今でも「駒」の声が聞こえてくる。